

時制の〈相対化〉：日英露の対照研究

山内 真理

1. はじめに

山内（2006）では、日本と英語の時制使用を比較対照し、間接話法における従属節内での時制の〈相対化〉と小説の地の文における時制の〈相対化〉が同種のメカニズムによって起こるのではないかと考えた。ただし、間接話法中の被伝達部における時制選択と小説の地の文における時制選択の間に「相関」があると一般化するためには、他言語における時制使用の観察をふまえた検証が必要になる。

それぞれに独自の時制・相の体系をもつ様々な言語のなかで、筆者は、ロシア語を第3の比較対象として考察を進めていくことにした。時制使用に関して日本語・英語と対置したとき、ロシア語は、いくつかの点でこの2言語の中間的な特徴を示すからである。本稿ではまず、間接話法の従属節内の時制のふるまいを中心に、ロシア語の「中間的」な特徴を確認する。

また、ロシア語は人称代名詞の使用や文の構造などの面では、どちらかといえば英語に近いが、時制・相の体系は日本語に近い。しかし、一見「対応」関係にある形式どうしを比較すると、その守備範囲に大きな違いがあることがわかる。本稿後半では、語りにおける時制選択について比較対照を進めていくための準備段階として、これら3言語の時制・相の体系を整理していく。時制・相の働きについての観察を通して、個別言語が、様々な意味を表現し分けるために、それぞれ限られた数の言語形式を駆使していること、そして

そのやり方には個別言語ごとの整合性があることを確認していく。

2. 日本語・英語との対比からみるロシア語の時制使用

2.1. 「語り」における非過去形使用

過去形を主要時制とする「語り」の場合、そこで使用される非過去形は「歴史的現在」と呼ばれることが多い。ただし、次の例からも明らかのように、英語などの「歴史的現在」とは異なり、日本語の非過去形の使用には「劇的効果」が伴うとは言いがたく、英語と比べると、「語り」における日本語の非過去形の使用は非常に「自由」度が高い。¹⁾

- (1) 佐伯はまずカーラジオのスイッチを入れた。チャンネルをニュースに合わせる。
— ニュースから察するに、この吹雪はさほど長くつづきそうになかった。

(松本清張)

Borras & Christian によれば、ロシア語の非過去形もまた、英語に比べると「ずっと普通に／頻繁に」用いられ、(2) や (3) に示すように、「語り」における過去形と非過去形の混在は珍しいことではない。「より厳密な時間的意味をもつため、このような形で混在することはない」英語の時制形式とは対照的である (Borras & Christian, 1971: 120-121)。

- (2) Sestry **nagnulis'** k nei, **sprašivajut:** čto s tovoi (Turgenev)
sisters **bend_P_Past** over her **ask_I_NonPast** what with you²⁾
(英訳: The sisters bent over her and asked her what was wrong.)

- (3) (On) **podxodit** četkim šagom, točno na doklad,
he **come_I_NonPast** briskly like for report
porovnjalsja, ščelknul v kabluki, **vzjal**
straighten_himself_up_P_Past click_P_Past in heels take_P_Past
pod kozyrek (Furmanov)
under cap

英訳：(He) comes up briskly, as if to make a report, straightens himself up,
clicks his heels, and salutes.

このように、英語と比較したとき、「語り」における非過去形の「自由」な使用という点で日本語とロシア語は極めて類似している。日本語とロシア語が、英語と大きく異なる点は、“grammaticalised expression of location in time” (Comrie, 1985:9) としての時制形式の使用を決定づける「参照点 (reference point)」の選択の仕方にある。英語の時制形式は、ほぼ常に、発話時を参照点とする「絶対時制」として用いられる (Comrie, 1985:36, 56) のに対し、日本語やロシア語の時制形式は、「コンテキストから与えられる任意の時点」を参照点とする。「発話時」は「可能な参照点の一つ」にすぎず、発話時以外を参照点とする「相対時制」としても用いられる (Comrie, 1985:36, 56 ; Barentsen, 1996:17-18; 山内, 2006:169)。

「参照点」の選択におけるこのような違いが、「語り」における時制選択にどの程度まで関与するのかについては今後の考察課題とし、以下では、間接話法の従属節に注目し、日本語および英語と対比したとき、ロシア語がその「中間」的な特徴を示すことを見ていく。

2.2. 間接話法における「相対化」

ここでは、間接話法の被伝達部における時制選択について、伝達動詞が過去形、元の伝達内容が非過去形（現在・未来）の場合をとりあげて考察する。時制の一致 (Sequence of Tenses) の規則に従う言語という意味で典型的な「SOT言語」とされる英語では、(4b) や (5b) に示すように、伝達動詞が過去形であれば、被伝達部の動詞はそれに合わせて過去形にシフトさせるのが普通である。一方、(4b') や (5b') のように、間接話法の被伝達部で非過去形が用いられる場合もあるが、これが可能になるのは、「アンナが泣いて

いる」「ジョンが明日到着する」という発言が、発話時点でも妥当である場合に限られる。

- (4) a. (直接話法) John said: “Anna is crying.”
 b. (間接話法) John said that Anna was crying.”
 b'. (間接話法) John said that Anna is crying.”
- (5) a. (直接話法) John said: “I will arrive tomorrow.”
 b. (間接話法) John said that he would arrive the next day.
 b'. (間接話法) John said that he will arrive tomorrow.

このように、英語では、時制の一致に従う場合も ((4b) (5b))、従わない場合も ((4b') (5b'))、被伝達部で伝えられる事態は、発話時を参照点として時間軸上に位置づけられる。これに対し、「非SOT言語」として知られる日本語では、「アンナが泣いている」「ジョンが明日到着する」という発言が、発話現時点でも妥当であるかどうかに関わらず、被伝達部では、(6b) や (7b) のように、直接話法と同じ時制を使わなければならない(山内, 2006:173)。言い換えれば、日本語では、間接話法の被伝達部の時制は常に「相対時制」として解釈され、そこで伝えられる事態は、主節の伝達行為が起こった時点参照点として時間軸上に位置づけられる。従って、機械的に時制を過去形にシフトさせた「ジョンはアンナが泣いていたと言った」という文は、(6)と同じ意味には解釈できない。同様に、「ジョンは(自分が)翌日着いたと言った」という文も、(7)とは全く異なる意味になる。

- (6) a. (直接話法) ジョンは「アンナが泣いている」と言った。
 b. (間接話法) ジョンはアンナが泣いていると言った。

- (7) a. (直接話法) ジョンは「明日着きます」と言った。
 b. (間接話法) ジョンは翌日着くと言った。

ただし、日本語では、英語やロシア語とは異なり、直接話法と間接話法の違いが明確ではない。2種類の話法があるというより、むしろ、「着くよ」「着きます」のように聞き手志向のモダリティを含んでいれば「直接話法的」、含まなければ「間接話法的」というように、関連要因によって「間接度」が変移すると考えるべきであろう(鎌田, 2000:85-116)。

ここでロシア語に目を移すと、ロシア語は、統語的には日本語より英語に近く、直接話法と間接話法は明確に区別される。まず、(8b)と(9b)に示すように、間接話法は、従属節を導く接続詞 *čto* を含む。また、(9a)と(9b)から分かるように人称表示のシフトも明示的である (*ja priedu* → *on priedet*)。その一方で、ロシア語は、日本語と同様「非SOT言語」に分類でき(Barentsen, 1996)、伝達動詞が過去形、元の伝達内容が非過去形(現在・未来)の場合、間接話法の被伝達部では、直接話法と同様に非過去形が義務的に用いられる((8b)の *plačet*, (9b)の *priedet*)。すなわち、間接話法の被伝達部の時制は、日本語と同様に「相対時制」として解釈されるのである。(Comrie, 1985:107-109; Barentsen, 1996:15-16)。

- (8) a. (直接話法) Džon **skazal**: “Anna **plačet.**”
 John **say_P_Past** Anna **cry_I_NonPast**
 b. (間接話法) Džon **skazal**, čto Anna **plačet.**
 John **say_P_Past** that Anna **cry_I_NonPast**
- (9) a. (直接話法) Džon **skazal**: “Ja **priedu** zavtra.”
 John **say_P_Past** I **arrive_P_NonPast** tomorrow
 b. (間接話法) Džon **skazal**, čto **on priedet** na sledujuščij den’.
 John **say_P_Past** that he **arrive_P_NonPast** on next day

この3言語について、ここまで見てきたことを表1にまとめておく。かなり単純化しているものの、ロシア語の「中間的」な特徴が確認できるだろう。

表1 日英露における「間接話法」

	英 語	ロシア語	日本語
直接話法と間接話法の明確な区別	有	有	無
被伝達部における時制の相対化	無	有	有

2.3.被伝達部における時制選択の随意性

この節では間接話法における「時制の一致」現象に関して、英語とロシア語の興味深い対比を見ておく。上で触れたように、英語では、伝達動詞が過去形であれば、被伝達部の動詞はそれに合わせて過去形にシフトさせるのが普通であり、被伝達部の内容が発話時点でも妥当である場合に限り、間接話法で非過去形を用いることが可能になる。ただし、このような随意性が許されるかどうかは、主節の動詞のタイプによる。安藤によれば、時制の一致が随意的になりうるのは、(10a) にあげた、*say, report* など「発言」を含む行為を表す動詞と、「従属節の命題内容が真であることを話し手が前提としていることを示す叙実的述語」の場合である。これに対し、(10b) にあげた「非叙実述語」の場合は、時制の一致が義務的になる。「非叙実的述語」には、「思考・信念」を表現する述語 (*know, think, insist* など) と「発言の仕方」を表現する動詞 (*whisper, snort* など) が含まれる (安藤, 1983:250-258)。

(10) a. 時制の一致が随意的：

John said (reported/ told/ mentioned/ asked/ regretted/ discovered/ grasped/ realized/ proved/ showed/ noticed/ remembered/ warned/ was amazed) that the earth {was / is} round.

b. 時制の一致が義務的：

*John knew (was aware/ forgot/ thought/ believed/ dreamed/ imagined/ figured/ wished/ hoped/ asserted/ alleged/ claimed/ insisted/ whispered/ snorted/ quipped) that Mary {was/ *is} a spy. (安藤, 1983:250)*

(10a) のタイプの述語の場合、上述のように、被伝達部の内容が発話時にも成立している場合に、時制使用に選択の余地が出てくる。さらに、話し手が、発話時の状況との関連性を表明しようとしている場合に、非過去形が選択される (Riddle, 1986)。これに対し、(10b) のタイプの述語の場合は、時制の一致に義務的に従うことになるが、これは次のように説明できる。まず、「思考・信念」の述語の場合は、思考や信念の内容について「責任を負うことができる」のは、思考主体 ((10) ではJohn) のみであり、話し手の関与する余地がない。また「発言の仕方」を表現する動詞は、伝達部の主語の「発言を客観的に伝達する」ための動詞であり、そもそも「話し手の信念の入り込む余地がない」(安藤, 1983:251, 266)。

このように、時制の一致が義務的であるか、随意的であるかという動詞のタイプの違いも、「発話者の視点から、発話者の<いま・ここ>と、そうでない世界が区別され、非過去形は、つねに発話者の<いま・ここ>との関わりを含意する」(山内, 2006:172) という、英語の時制使用の特徴から説明することができる。英語では、この特徴と矛盾しない場合に限り、被伝達部での時制選択が随意的になるのである。

被伝達部における時制選択の随意性に関して、ロシア語では、英語とは対照的とも言えるふるまいが観察される。伝達動詞が過去形、元の伝達内容が非過去形の場合、被伝達部では非過去形、すなわち「相対時制」を用いるのが普通であるが、主節の動詞のタイプによって、「絶対時制」の使用が可能になる場合がある (Forsyth, 1970:69-70; Borrás & Christian, 1971:144-146; Barentsen, 1996)。被伝達部における時制選択が随意的になるのは、主節の

動詞が (11) にあげるような「思考」「知識」「知覚」を表す場合である。

- (11) *znat'* (know (I)), *dumat'/podumat'* (think (I/P)), *ponimat'/ponjat'* (understand (I/P)), *rešat'/rešit'* (solve (I/P)), *kazat'cja/pokazat'cja* (seem (I/P)), *videt'/uvidet'* (see (I/P)), *smotret'/posmotret'* (look (I/P)), *slyšat'/uslyšat'* (hear (I/P))

(Forsyth, 1970:70)

随意的な時制選択の例として、Barentsen (1996:21) に紹介されている *Alice in Wonderland* の2種類のロシア語訳を見ておこう。原文を (12a) に示している。被伝達部における過去形の述語 (*were all turning*) が、Nabokov 訳では過去形に翻訳されているのに対し ((12b))、Demurova 訳では非過去形に翻訳されている ((12c)) ことが確認できる。

- (12) a. Alice **noticed**, with some surprise, that the pebbles **were all turning** into little cakes and they lay on the floor ... (*Alice in Wonderland*, Chapter IV)

- b. Ania **zametila** ne bez udivlen'ja, čto kamuški, ležaščie na polu, Ania **notice_P_Past** not without surprise that pebbles lying on floor odin za drugim **prevraščalis'** v kroxotnye pirožki. (V. V. Nabokov 訳)
one after other **change_I_Past** into small pies

- c. Alisa mež tem s udivleniem **zametila**, čto kameški, upav Alisa meanwhile with surprise **notice_P_Past** that pebbles having-fallen na polu, totčas **prevraščajutsja** v pirožki. (Demurova 訳)
on floor immediately **change_I_NonPast** into pies

Borras & Christainによれば、「思考」「知識」「知覚」の動詞の場合は随意的になるとはいえ、やはり被伝達部では非過去形を用いる方が圧倒的に多く、さらに、被伝達部で過去形を用いると、その思考／知覚内容が、本人がそう思っているだけではなく、実際にその事実があったことが強調されるという。³⁾

By placing the subordinate verb in the past tense, the writer emphasizes the fact that the thought or feeling of the person concerned were reflections of surrounding reality and not subjective impressions.

(Borras & Christian, 1971:145)

以下の2例はいずれも Borras & Christian に引用されている例だが (1971:144-145)、上の見方を適用すれば、被伝達部で非過去形 (*umret*, *umiraet*) が用いられている (13) では、実際に瀕死の状態だったかは定かでないのに対し、(14) では彼がそう思っているだけでなく、実際に彼女が祈っていたという事実を強調するために過去形 (*molilas'*) が用いられていると説明できる。

- (13) Knjaz' Andrei ne tol'ko **znal**, čto **umret**,
 prince Andrey not only **know_I_Past** that **die_P_NonPast**
 no on **počuvstvoval**, čto **umiraet** i ... (Tolstoy)
 but he **feel_I_Past** that **die_I_NonPast** and ...
 英訳 : Prince Andrey not only knew that he would die, but he felt that he was dying, ...

- (14) Ona userdno molilac'... On **čuvstvoval**, čto ona **molilas'**
 she earnestly **pray_I_Past** he **feel_I_Past** that she **pray_I_Past**
 i za nego. (Turgenev)
 and for him
 英訳 : She was earnestly praying ... He felt that she was praying for him, too.

間接話法の被伝達部における時制選択の随意性に関して、英語とロシア語に見られる対比は表2のようにまとめることができる。英語とロシア語では、現発話者 (現在の話し手)、発話/思考の主体 (伝達文主節の主語)、被伝達部の内容 (伝達/思考内容)、思考/伝達内容と現実世界での事態との関係が、対照的なやり方で時制選択に反映されていることが分かる。

表2 間接話法の被伝達部動詞の比較：英語 vs. ロシア語

		英 語	ロシア語
無標の時制		過去形(発話時を参照点とした絶対時制)	非過去形(行為・思考の時点参照点とした相対時制)
A	無標の時制が義務的	主節の動詞が「思考・信念」などを表す場合	主節の動詞が「発話行為」を表す場合
B	時制選択が随意的	主節の動詞が「発話行為」など表す場合	主節の動詞が「思考・知覚」などを表す場合
B	無標の時制	過去形(絶対時制)	非過去形(相対時制)
	有標の時制	非過去形(絶対時制) *伝達内容が発話時にも(話し手の世界でも)成立している場合に選択可能	過去形(絶対時制) *思考/知覚内容が、思考/知覚時点で事実として(=知覚主体の思考の外)でも成立している場合に選択可能

ここで、直接話法では非過去形で表される思考/知覚内容を、間接話法で表現する場合(表2のBタイプ)に注目して、日本語も交えて比較してみる。ロシア語では、(15a)のように、思考/知覚の主体が考えた時点のまま、非過去形(*sledit*)を用いるのが普通であるが、(15b)のように、その思考/知覚内容がその時点で事実として成立していることを強調するために、過去形(*sledil*)を用いることもできる。これに対し、ほぼ常に絶対時制が用いられる英語では、(16)のように過去形(*was watching*)が義務的であるが、これは、他人の思考/知覚内容に対して現発話者が関与する余地がないためである。一方、日本語では、(17)のように、思考/知覚の内容は、思考/知覚の主体が考えた時点のまま、非過去形(「監視している」)で表現するしかなく、思考時点での事実と合っているかどうか、現発話者が発話時点で妥当だと認めるかどうか、といった違いは時制選択には全く関与しない(山内, 2006:172-173)。

(15) a. Ja xorošo **videl**, čto ded **sledit** za mnoi ...
 I well **see_I_Past** that old man **watch_I_NonPast** at me
 i bojalcja ego. (Gor'kij; 城田(2003:135)に引用)
 and be_afraid_I_Past him

b. Ja xorošo **videl**, čto ded **sledil** za mnoi ... i
 I well **see_I_Past** that old man **watch_I_Past** at me and
 bojalcja ego.
 be_afraid_I_Past him

(16) I **knew** that the old man **was/*is watching** me ... and I was afraid of him.

(17) おじいさんが…私を監視している／*監視していたことをよく知っていたので、怖かった。

間接話法における「時制の一致」規則の働き方、特に他者の思考や知覚を報告する場合の過去形／非過去形の守備範囲の違いは、この3言語について小説ないし「語り」の地の文における時制選択を比較し、考察を進めていくうえで非常に示唆的である。特に、間接話法を用いて他者の思考や知覚を報告する場合の時制選択と、作中人物の思考や知覚を表現する場合の時制選択(英語では、非過去形が用いられた場合は **Free Direct Thought**、過去形が用いられた場合は **Free Indirect Thought**と区別される⁴⁾)との間に、密接な関係があるのではないかと考えられる。そこでも同様にロシア語の「中間的」な特徴が見出せるかどうか、詳細に検証していきたいと考えている。⁵⁾

3. 英語・ロシア語・日本語における時制・相形式の体系

2節では、間接話法の従属節における時制選択について、日本語・ロシア語・英語を比較し、日本語・英語と比較したときのロシア語の中間的な性格

を指摘した。ここでの考察を踏まえて、従属節における時制選択と「語り」の地の文における時制選択の間に共通のメカニズムがあるという仮定を今後検討していくことになる。Fleischman (1990:7-12) が主張するように、「語り」における時制・相形式は、基本的な「指示的」(referential) 意味を超えて機能するが、指示的な意味と全く無関係に機能するのではない。

...the tense-aspect oppositions available in a given grammar necessarily condition and constrain the pragmatic extensions this morphology can undergo. For example, in languages with PFV [Perfective] and IPFV [Imperfective] aspects, this opposition commonly serves to mark the discourse contrast between events and description, whereas in languages in which perfectivity is not expressed morphologically this discourse contrast cannot be marked unambiguously, at least not in the same way. (Fleischman, 1990:12, 下線は筆者)

「語り」における機能の拡張を十分にとらえるための準備として、以下では、日本語・ロシア語・英語における時制・相の形式と、その指示的な意味を整理しておくことにする。まず、それぞれの言語での時制・相の体系は、以下のようにまとめることができる。日本語とロシア語は、時制・相に限れば、動詞の活用は比較的単純である。⁶⁾

表3 時制・相形式の体系：日本語

	完 結 相	継 続 相
非 過 去	書く (will write, writes)	書いている (will be writing, is writing, has written, wrote)
過 去	書いた (wrote, has written)	書いていた (was writing, had been writing, had written)

表4 時制・相形式の体系：ロシア語

	完了体	不完了体
非過去		byt' pisat' (will write, will start writing, will be writing)
	napisat' (will write (up), writes (up))	pisat' (writes, is writing)
過去	napisal (wrote, has written, had written)	pisal (wrote, was writing, has written)

表5 時制・相形式の体系：英語

	単純形	進行形	完了形	
未来	will write	will be writing	will have written	will have been writing
現在	writes	is writing	has written	has been writing
過去	wrote	was writing	had written	had been writing

表(3)～表(5)で網をかけた相範疇が「有標」項である。有標の範疇は、形態的には無標の範疇よりも標識が多く、意味的には“narrowly defined category” (Chung & Timberlake, 1985:239) であり、無標の範疇よりも使用条件が厳しい。⁷⁾ 表中、太枠で囲んだ部分に注目してほしい。日本語の「完結相」(ル形)、ロシア語の「完了体」、英語の「単純形」は、“Perfective” に属する相であり、日本語の「継続相」(テイル形)、ロシア語の「不完了体」、英語の「進行形」は、“Imperfective” に属する相である (Comrie, 1976)。⁸⁾ しかし、ロシア語の「完了体」(有標項) は、日本語や英語の Perfective 範疇 (無標項) よりもずっと使用条件が厳しい。同様に、日本語・英語の Imperfective 範疇 (有標項) は、ロシア語の「不完了体」(無標項) にはない、それぞれ独自の使用条件をもつ。日本語 (表3) とロシア語 (表4) には、活用形に大雑把な英語訳をつけてあるが、もう少し詳しく、この3言語における時制・相形式の対応関係をみておこう。

一般に、事態を「全体」としてとらえる相である**Perfective**は、複数の事態の連続においては、「継起性」「順次性」を表す。(18)に示すように、完了体過去形(露)、単純過去形(英)、タ形(日)は、同じように、**Perfective**として「継起性」表示のために用いることができる。

- (18) a. On molča **nadel** paľto, **vzjal** šapku i **ušel**.
 he silently put_on_P coat took_P hat and left_P
 b. He silently put on his coat, took his hat and left.
 c. 彼は黙ってオーバーを着た。帽子を手を取った。そして出て行った。
 (彼は黙ってオーバーを着、帽子を手を取って、出ていった)

これに対し、**Imperfective**は事態の「一部」ととらえる相であり、他の事態との「同時性」「共存」「重なり」を表す場合に用いられる。(19)に示すように、不完了体過去形(露)、過去進行形(英)、テイタ形(日)を用いた「読む」という動作は、その一部が「部屋に入る」という別の動作と重なっている。

- (19) a. Kagda ja **vošel**, ona **čitala** gazetu.
 when I entered_P she read_I newspaper
 b. When I entered the room, she was reading the newspaper.
 c. 私は部屋に入った。彼女は新聞を読んでいた。
 (部屋に入ると、彼女は新聞を読んでいるところだった)

(18)と(19)は、3言語の**Perfective / Imperfective** 範疇が、同じように働いている例だったが、有標項であるロシア語の完了体は、一般の**Perfective** 範疇よりも使用条件が厳しく、使用範囲が狭い。完了体は事態の「具体性・特定性・一回性」を表し、また「実現・完了」や「結果の残存」を強く含意するため、これに合わない意味が含まれる場合は用いることができないから

である。そうした意味は無標項である不完了体の分担となるため、不完了体は一般のImperfective範疇、また日本語の継続相や英語の進行形（共に有標項）と比べて、使用範囲がかなり広い。

例えば、「習慣」は、完了体の「具体性・特定性・一回性」の意味と相容れないため、不完了体が用いられる（(20a)）。英語の進行形は「一時的な習慣」であることを伝える場合に用いることもできるが、通常、「習慣」は単純過去形の守備範囲である（(20b)）。日本語では、継続相にも「習慣」を表す用法があるが、完結相も「習慣」の意味を排除しない（(20c)）。

- (20) a. Každý večer ona **čítala** (*pročítala) gazetu.
 every night she read_I (read_P) newspaper
 b. She **read** (*was reading) the newspaper every night.
 c. 毎晩、彼女は新聞を読んだ／読んでいた。

また、一つの事態の完了を前提として次の事態が起こった、あるいは、それぞれの動作が最後まで遂行されたと言いたい場合には完了体が用いられるが、そのような動作の完了や終了の局面に注意を向けない場合は、完了体を用いることはできない。そうした文章の例が(21)である。最初の事態（「起きる」）だけは、その完了がそれ以降の事態が起こる前提となるため、完了体が必要になるが、それ以外の事態にはすべて不完了体が用いられる。事態の「一部・過程」に注目するためでもなく、事態どうしの「同時性」を表現するためでもない点に注目されたい。ここでは、不完了体は、「完了・結果」に注目しないために用いられるのである。これに対し、有標のImperfective範疇である進行形（英）や継続相（日）は、事態の「一部・過程」を取り上げ、他との「同時性」を明確に表現するための範疇であり、事態の列挙には用いることができない。そこで、無標の範疇であり、事態の

「完了」や「結果」に注意を向けなくても使える単純過去形（英）やタ形（日）が用いられることになる。

- (21) a. Včera ja **vstala** rano.
 yesterday I got_up_P early.
 Ja **stirala** be'e, a zatem **povtrjala** projdennyj material.
 I washed_I linen and then repeated_I learned material
 Večerom ja **pisala** sočinenie i **učila** stixotvorenie.
 in_the_evening I wrote_I essay and learned_I poem
 (cf. Borrás & Christian, 1971:125)

- b. Yesterday, I got up early. I washed (*was washing) my linen and then reviewed (*was reviewing) the material I had learned. In the evening I wrote (*was writing) an essay and learned (*was learning) a poem.

- c. 昨日は早起きした。下着類を洗った (*洗っていた)。それから学校でやったところを復習した (*復習していた)。夜には、エッセイを書いた (*書いていた)。そして詩を覚えた (*覚えていた)。
 (昨日は早起きした。下着類を洗い、それから学校でやったところを復習した。夜には、エッセイを書いたり、詩を覚えたりした。)

(22a) の「結果の残存」を示す用法は、ロシア語の完了体の「実現・完了」の含意を示す典型的な例である。こうした意味を出さずに、その事態があったか無かったかを確認するだけの場合は、(23a) (24a) のように不完了体を用いることになる。付け加えれば、不完了体の「事態の有無の確認」の意味には「経験」の意味が含まれる ((24) を参照)。

- (22) a. Knigu ja **pročital**, mogu vernut' ee vam.
 book I read_P can return it to_you

b. I've read (read) this book. I can return it to you.

c. この本は読みましたので、お返しできますよ。

(23) a. Čto vy **delali** včera? – Včera ja **čital** žurnaly v biblioteke.
what you did_I yesterday yesterday I read_I magazines in library

b. What did you do yesterday? – Yesterday I read magazines in the library.

c. 昨日は何をしましたか? – 昨日は図書館で雑誌を読みました。

(cf. Rassudova, 1968/1975 : 8-9)

(24) a -Vy **čital** <<Boinu i Mor>> L'va Tolstovo?
you read_I war and peace of_ Lev Tolstoj

-Net, ja ne **čital** etu knigu.

no I not read_I this book

-A <<Mat'>> Gor'kogo **čital**?

then mother of_Gor'kii read_I

-Da, ja **čital** ee neskol'ko let nazad.

yes I read_I it several years before

(cf. Rassudova, 1968/1975 :24-25)

b. -Have you read *War and Peace* by Lev Tolstoj?

-No, I haven't read the book.

-Then have you read Gor'kii's *Mother*?

-Yes, I read it several years ago.

c. レフ・トルストイの『戦争と平和』を読んだことがありますか。

-いいえ、読んだことはありません／読んでいません。

-では、ゴーリキの『母』は読みましたか／読んでいますか／読んだことがありますか。

-はい、数年前に読みました／読んでいます／読んだことがあります。

ここまで、日本語および英語との対応関係に触れながら、ロシア語の完了体過去形／不完了体過去形の用法のごく基本的な部分を見てきた。表6に、下位分類した8つの意味をまとめてある。これらの意味を、ロシア語では2種類、英語と日本語では2～3種類の形式で表現し分けているが、どの意味とどの意味を同じ形式で指すか、その分担を決定する基準が個別言語ごとに異なるために、言語間での形式どうしの対応関係は一見複雑になる。⁹⁾

表6 時制・相形式の対応関係

	ロシア語	英語	日本語
(18) 継起性	完了体過去 napisal	単純過去 wrote	完結相過去 書いた
(19) 同時性	不完了体過去 pisal	過去進行 was writing	継続相過去 書いていた
(20) 習慣	不完了体過去 pisal	単純過去 wrote	完結相過去 書いた 継続相過去 書いていた
(21) 列挙：結果／ 過程への注目なし	不完了体過去 pisal	単純過去 wrote	完結相過去 書いた
(22) 現在へ結果の 残存	完了体過去 napisal	単純過去 wrote (現在完了 has written)	完結相過去 書いた (継続相非過去 書いている)
(23) 事態の有無確認	不完了体過去 pisal	単純過去 wrote	完結相過去 書いた
(24) 経験	不完了体過去 pisal	単純過去 wrote (現在完了 has written)	完結相過去 書いた (継続相非過去 書いている)

napisal - *wrote* - 「書いた」という Perfective に属する形式どうしの対応がみられるのは、(18) 「継起性」を表す場合だけであり、*pisal* - *was writing* - 「書いていた」という Imperfective に属する形式どうしの対応がみられるのは、(19) 「同時性」を表す場合のみである。

この一見「複雑」な対応関係は、有標の形式 (*napisal*, *was writing*, 「書いていた」) の使用基準が厳しく、その使用範囲が限られていることによる。上述のように、ロシア語の完了体過去 (*napisal*) は、単に「事態を全体としてとらえる」だけでなく、その事態の「具体性・特定性・一回性」を表し、

「実現・完了・結果」に注目することが要求される。また、ここでは詳しく見ていないが、**Imperfective**に属する英語の進行形は、他の事態との「同時性」や「進行中・変化の途中」を表すことが要求され、同じく日本語の継続相も、他の事態との「同時性」や事態の「持続性」を表すことが要求される。

このように有標の形式の使用範囲が狭い分（表中の太字部分を参照）、無標の形式の使用範囲が広くなり、**Perfective** であれ**Imperfective**であれ、各言語の無標の形式どうしが対応しあう意味領域も広がる（(20), (21), (23), (24)）。なお、いずれの言語でも、有標の形式が使用できない領域には無標の形式を用いる、という形で役割を分担している。

ここではロシア語の過去時制を中心に考察したが、非過去形の領域も合わせて整理しておく必要がある。また、複文をできるだけ扱わないようにしたこともあり、英語の過去完了形は扱っていない。過去時制の領域で興味深いのは、「現在への結果の残存」を表す完了体過去形と、単純過去形・現在完了形（英）、完結相過去形・継続相非過去形（日）の対応関係（表6（22））、そして、「経験」を表す不完了体過去形と、単純過去形・現在完了形（英）、完結相過去形・継続相非過去形・「～したことがある」形式（日）の対応関係（表6（24））である。現在完了形に関わるこれらの領域については、この部分だけに焦点をあてて考察する必要があるだろう。

4. おわりに

本稿では、まず、過去形を主時制とした「語り」における非過去形の使用が、日本語とロシア語では、英語に比べてかなり自由であることを確認した。また、英語とは違い、日本語とロシア語は、ともに「非SOT」言語であり、間接話法の被伝達部において「相対時制」が用いられるという共通点がある。さらに興味深い点として、ロシア語では、英語とは対照的に、「発話」の再

現ではなく、「思考」の再現の場合に、時制の選択が随意的になることを指摘した。これらは、日本語および英語と比較したとき、ロシア語をその「中間」に位置づける特徴である。

ここでの考察を発展させ、「語り」における時制使用についてこの3言語を比較していく準備として、後半では、それぞれの言語の時制・相体系を整理した。ロシア語の過去時制を中心として、その基本的な相対立から生じる個別的な意味・用法の区別を設定し、それぞれについて、言語ごとの相当する範疇どうしの対応関係を示した。「継起性」「同時性」については、各言語の **Perfective** に属する形式が前者を、**Imperfective** に属する形式が後者を表すという対応関係があるが、それ以外の意味については、各言語における無標項どうしが対応する。

最後に、本文では十分に触れることができなかつた点を補足しておきたい。日本語とロシア語の時制は、基本的には二項対立（非過去と過去）であるとみなすことができる。これに対し、英語では、助動詞、本動詞を含めて、形態論的には主要な対立項は現在形と過去形の二種類であるものの、単純未来を表す迂言形式 (*will*) の分布に偏りが無いことから、¹⁰⁾ 少なくとも、日本語・ロシア語と同じ意味で、非過去と過去の二項対立であるとはみなしにくい。仮に英語の時制を3項対立だとすると、英語では事態の位置を決めるのはもっぱら時制の役割であるのに対し、非過去と過去しかない日本語とロシア語では、事態の位置を決めるのに相の機能を援用しているとも考えられる (**Perfective** の非過去で「未来」を表す)。これを推し進めると、「時制の対立よりも相の対立が優勢な言語では、時制の相対化が起こる」という一般化を導くことも可能かもしれない。この点も念頭におきながら、研究をすすめていきたい。

注

- 1) この一見「自由」に現れる非過去形の使用に、規則性ないし一貫性があることは、すでに多くの研究によって示唆されている。最も体系的な分析としては工藤（1995）があげられる。また、山内（2001）では、完結相非過去形（ル形）に注目し、その使用の一貫性を示している。なお、本文の（1）を含む日本語の例の分析についても山内（2001）を参照されたい。
- 2) 以下、ロシア語の例文には、その下に最小限の注釈をつける。例えば、skazal の下につけた say_P_Past は、skazal が「言う、話す」という意味（say）の完了体動詞（Perfective）の過去形（Past）であることを示す。同様に、plačel の下の cry_I_NonPast は、plačel が「泣く」という意味（cry）の不完了体動詞（Imperfective）の非過去形（NonPast）であることを示す。
- 3) ただし、Forsyth（1070:70-71）では、主節で本文（11）にあげた動詞が用いられている場合、従属節の動詞は過去形でも非過去形でも意味は同じであるとする。文単位では解釈に差が出にくい程度のニュアンスの違いであるとも考えられるが、さらなる調査が必要である。
- 4) “reported speech”, 「描出話法」「自由間接話法」という用語は、発話内容か思考内容かを区別せずに、この双方に用いられるが、Leech & Short（1981）では、それぞれの談話的価値が異なることから、発話の再現形式を指す（Free）Indirect Speech と、思考の再現形式を指す（Free）Indirect Thought を区別している。山内（2006:182）も参照。
- 5) この3言語ともに、間接話法の従属節と、それ以外の従属節とでは、時制形式の振る舞いに違いがあることが指摘されており、この点もふまえた考察が必要になる。
- 6) 日本語には「～ていく」「～てくる」「～しかける」「～しはじめる」などの補助動詞をとともなう二次的な「アスペクト形式」があるが、これらの補助動詞も表3のように活用する。また、ロシア語の「非過去」形は、さらに、1人称単複、2人称単複、3人称単複のそれぞれで人称変化する。過去形は、男性単数・女性単数・複数のみ区別する。
- 7) 「有標性」（markedness）については、Comrie（1976:111-122）も参照のこと。
- 8) Comrie（1976）は、基本的な相の区別を“Perfective / Imperfective”の二項対立ととらえ、汎言語的な相の分類を試みた。それぞれの範疇は以下のように規定されている：“... perfectivity indicates the view of a situation as a single whole, without distinction of the various separate phases that make up the situation; while the imperfective pays essential attention to the internal structure of the situation.”（Comrie, 1976:16）
なお、“Perfect”（パーフェクト、ペルフェクト）は、この二項対立の枠外のものとして扱われる。本稿も同様の立場にたっている。
- 9) 「～したことがある」は日本語の時制・相形式の基本体系には含まれないため、表からは外してある。また、ロシア語の非過去形の使用領域は含まれていない。過去形に限っても、過去形の完了体と不完了体で区別しうる意味はもちろんこれだけではなく、この点では英語・日本語についても同様である。それらも網羅し、さらに語彙的アスペクトなども考慮に入れると、「対応関係表」ははるかに複雑なものになるだろう。
- 10) ロシア語で未来を表す迂言形式をつくる byt' は完了体とは結びつかない。

参考文献

- Anderson, L. B. (1982). The 'perfect' as a universal and as a language-particular category. In P. J. Hopper (ed.), *Tense-Aspect: Between Semantics & Pragmatics*, pp. 227-264. Amsterdam: Benjamins.
- 安藤貞雄. (1983). 『英語教師の文法研究』大修館書店.
- Barentsen, A. (1996). Shifting points of orientation in Modern Russian: Tense selection in 'reported perception'. In T. A. J. M. Janssen & W. van der Wurff (eds.), *Reported Speech*, pp.15-55. Amsterdam: John Benjamins.
- Borras, F. M. & Christian, R. F. (1971). *Russian Syntax*. Glasgow: Oxford University Press.
- Chung, S. & Timberlake, A. (1985). Tense, aspect, and mood. In T. Shopen (ed), *Language typology and syntactic description III: Grammatical Categories and the lexicon*, pp. 202-258. London:Cambridge University Press.
- Comrie, B. (1976). *Aspect*. London: Cambridge University Press.
- Comrie, B. (1985). *Tense*. London: Cambridge University Press.
- Fleischman, S. (1990). *Tense and Narrativity*. Austin: University of Texas Press.
- Forsyth, J. (1970). *A Grammar of Aspect: Usage and Meaning in the Russian Verb*. London: Cambridge University Press.
- Hollesbrandse, B. (2005). Sequence of Tense: New insights from cross-linguistic comparison. In B. Hollesbrandse & Co Vet (eds.), *Cross-linguistic Views on Tense, Aspect and Modality*, pp. 49-59. Amsterdam: Rodophi.
- 鎌田修. (2000). 『日本語の引用』ひつじ書房.
- Leech, G. N. & Short, M. H. (1981). *Style in Fiction*. London: Longman.
- Rassudova, Olga P. (1968). *Upotreblenie vidov glagola v russkom jazyke*. [Use of the aspects of the verb in the Russian language.] Moskva: MGU. 訳) 磯谷孝. (1975). 『ロシア語動詞 体の用法』吾妻書房.
- Riddle, E. (1986). The Meaning and Discourse Function of the Past Tense in English. *TESOL Quarterly*, 20-2: 267-286.
- Smith, C. S. (1991). *The Parameter of Aspect*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- 城田俊. (2003). 『現代ロシア語文法 中・上級編』東洋書店.
- 山内真理. (2001). 日本語の「語り」における完結相非過去形の役割. 『大阪薬科大学教養論叢・ぱいでいあ』25:99-133.
- 山内真理. (2006). 小説における視点と時制:日英時制体系における“参照点としての発話時”. 『神戸海星女子学院大学 研究紀要』44: 167-192.